

英語の音節構造は両音節性か再音節性か

小 林 泰 秀

1. は じ め に

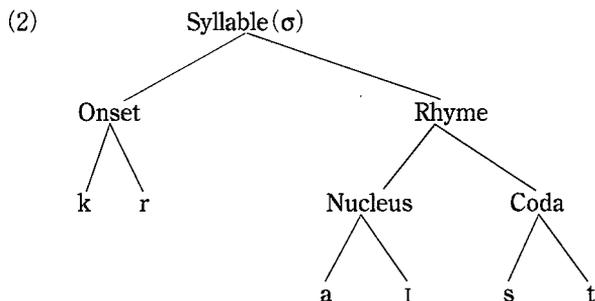
本稿は、英語の辞書に記載されている音節の区切り方は、どのようにしてなされているかを説明し、その区切り方が音韻上妥当でない点を指摘する。そして最後に、妥当な音節構造とは何かを、音素的レベルと音声的レベルの両面から提示する。なお、本稿での音節区分は、主に『研究社新英和大辞典』第5版、1980に基づいている。

音節とは、「それ自身の中には切れ目がなく、前後と区分される一まとまりを成す、単音の一つまたはそれ以上の連続体」(新英語学辞典、1982: 1215)である。音節は、音節の中心となる音節主音 (syllabic) と、その前後にある音節副音 (non-syllabic) から成り立っている。音節主音となるのは、主に聞こえ度 (sonority) の高い母音であるが、子音の中でも聞こえ度の高い鼻音 [m], [n] や流音 [l], [r] が音節主音になる場合がある。次のように母音の代わりに音節主音となる子音は、成節子音 (syllabic consonant) と呼ばれている。

- (1) a. 鼻音: [blas̩m̩] </blasəm/ 'blossom', [bat̩n̩] </batən/ 'button'
 b. 流音: [æp̩l̩] </æpəl/ 'apple', [wɔ̩t̩r̩] </wɔtər/ 'water'

音節構造についてはいろいろな説があるが、本稿は基本的には Selkirk (1982:341) に従い、音節は頭子音 (onset) と脚韻 (rhyme) に分かれ、更に脚韻は核音 (nucleus) と尾子音 (coda) に分かれているとする。例

えば, Christ の音節構造は次のようになる。



音節を頭子音と脚韻に切り離し、核音と尾子音を結びつける理由として二つ挙げよう。一つは、詩歌などが韻を踏んでいる場合、脚韻の部分が続り返されていることである。例えば, day-hay, mate-nominate, lines-shrines, command-land の下線部のようである。二つには、混成語 (blend) が頭子音と脚韻の間で切り離されていることである。次の例で下線の部分を結びつけたのが混成語であるが、前の語も後の語も、頭子音とその他の部分に分けられている。

- (3) a. ch-annel (チャンネル) + t-unnel (トンネル) → chunnel (海底トンネル)
- b. br-eakfast (朝食) + l-unch (昼食) → brunch (昼食兼用のおそい朝食)
- c. sm-oke (煙) + h-aze (かすみ) → smaze (煙幕)

音節が頭子音と脚韻に二分される理由を述べたが、これは英語の場合であり、日本語の音節は核音である母音が頭子音と結びついている。従って、音節は核音と次の分節音の境が二つのモーラ (mora) の結合点であり、CVC は CV と C に分けられる。次の例は西光 (1997:24) から

のものであるが、(4a) は混成語で、(4b) は言い間違いの語である。

(4) a. o/ (si) p.po → oppo (おっぽ)

b. tek.kin kon.ku.rii.to → kok.kin ten.ku.rii.to (鉄筋コンクリート)

(4b) では CV モーラのみ入れ換わっており、頭子音と母音の結びつきが強いことが分かる。

2. 辞書に見られる音節区分

音節は切れ目なく発音される音のかたまりであると言っても、辞書に記載されている音節の区切り方は、必ずしも音声上のものではない。辞書での音節区分は、形態上のもの、音韻上のもの、スペリングによるものと三つに分けられるであろう。これら三つの区切り方には重なる部分もあるのであるが、その原則を述べてゆく。

2.1. 形態的音節区分

A. 複合語

複合語は二つの語が結合してできたものであるが、語の境界が同時に音節境界となる。

(5) black.board, break.fast, head.ache, over.grown, wide.spread

B. 接頭辞

語根に接頭辞が付加して派生される語は、接頭辞の直後が音節境界となる。下線部が接頭辞である。

- (6) con.cede, dis.agree, in.ept, un.armed, un.kind

C. 接尾辞

語根に接尾辞が付加している語は、接尾辞の直前が音節境界となる。

- (7) a.void.ance, bak.ery, clear.ance, de.vot.ed, fail.ure, lem.on.ade,
pan.el.ist, rain.y, re.fus.al, sav.ing, tast.y, teach.er, vic.tim.ize,
wid.en<wide+en

接尾辞の付加によって、接尾辞の前の音節に強勢がなくなった場合には、非強勢音節は尾子音を取らないので、語根の最後の子音は、接尾辞の頭子音となる。

- (8) a. disciple [dɪsɪpəl] + ine → dɪs.ci.pline [dɪsɪplɪn]
b. Japan [dʒəpæn] + ese → Jəp.a.nése [dʒəpənɪz]
c. preside [prɪsaɪd] + ent → prés.i.dent [prezɪdənt]
d. commune [kəmjun] + ist → cóm.mu.nist [kəmjunɪst]
e. negate [nɪgət] + ive → nég.a.tive [nɛgətɪv]

(8) の語末子音が次の接尾辞の頭子音になるのは、非強勢音節の脚韻は短母音のみであるという一般的原則に基づいたものである。しかし、victimize, lemonade は vic.ti.mize, lem.o.nade とは区分されずに、vic.tim.ize, lem.on.ade と区分されている。これは、語根と接尾辞の境界の強さによるものである。victim+ize, lemon+ade は語根と接尾辞が独立しており、接尾辞は前の語根に対して中立的である。それに対して nég.a.tive では、接尾辞-ive は前の語根に影響を与え、非中立的である。非中立的な接尾辞は語根との結びつきが強いため、派生語全体に音節区分規則が適用されている。acting が act.ing と区分され、active が ac.tive

と区分されているのも、形態素境界の強さによるものである。同じ接尾辞でも区切り方の異なるものがある。failure は fail.ure のように語根が独立しているが、creature は create に -ure が付加することで発音が変わるので、形態素境界を無視して crea.ture と区分されている。

2.2. 音韻的音節区分

A. 重音節と軽音節

音節には、脚韻が枝分かれしている重音節 (heavy syllable) と、脚韻が枝分かれしていない軽音節 (light syllable) とがある。一般的に、重音節には強勢が付与され、軽音節は強勢を取らない。脚韻が枝分かれしている重音節の構造には、核音が枝分かれするものと、尾子音を取るものがある。核音が枝分かれしている構造は、二重母音、あるいは長母音の -(C)VV- の音節であり、尾子音を取る構造は、-(C)VC- の閉音節である。一方、強勢の付与されない軽音節は、脚韻は短母音のみであり、-(C)V- の開音節である。音節には -(C)VVC- のように二重母音と尾子音を取ったり、-(C)VCC- のように尾子音を二つ取る超重音節 (superheavy syllable) と呼ばれるものもあるが、重音節と同じく強勢の付く音節として扱われる。

強勢の置かれる音節を重音節とし、非強勢の音節を軽音節とすると、音節区分は次のようになる。

(9) 第一音節が重音節の語

- a. (C) \bar{V} -. áu.to, béau.ty, féa.ture, mú.sic, sé.cret, stú.dent, wá.ter
- b. (C)VV-. Á.pril, lí.on, ná.tive, néigh.bor, ó.pen, pó.et
- c. (C)VC-. cóv.er, dú.ing, féath.er, gív.en, móth.er, liq.uid, réc.ord (名詞), trá.v.el, vál.ue

(9c) の feather, mother の th は一つの分節音 /ð/ であるので、t と h

は切り離せない。二重母音は直後の子音を尾子音としないのであるが、形態素境界をはっきりと示す場合には *bak.ery*, *fail.ure*, *tast.y* のように超重音節になることもある。

語頭の音節に強勢がない場合には、次のように母音間の子音は後の母音と結合している。

(10) 第一音節が軽音節の語

a.bóve, *a.bróad*, *a.cróss*, *ca.nál*, *re.córd* (動詞), *se.léct*

rec.ord と *re.córd* は音節の区切り方が異なるが、実際の発音でも *récord* の *rec-* はひとかたまりに発音され、*recórd* は、*re* と *cord* には切れ目がある。しかし、強勢に合わせた音節構造を形成している辞書の区分別が、そのまま発音を反映するものにはなっていない。このことに関しては後で述べよう。

重音節と軽音節のある語をみてみよう。

(11) 第一音節が重音節、第二音節が軽音節の語

án.i.mal, *ár.ti.cle*, *díl.i.gent*, *én.e.my*, *gló.ri.ous*, *méd.i.cal*, *ób.sta.cle*,
rá.di.al, *sála.ry*

(12) 第一音節が軽音節、第二音節が重音節の語

be.gín.ner, *ba.róm.e.ter*, *ca.pác.i.ty*, *Ca.ná.dian*, *be.gó.nia*, *ge.ól.o.gy*

以上のように、強勢の位置によって VCV の C が前の母音に結合する (V.CV) か、後の母音に結合する (VC.V) かが決められる。

B. 子音連結

母音間に二つ以上の子音が連結している場合には、通常最初の子音を

前の母音と結合し、残りの子音は後の母音と結合する。従って、最初の子音は尾子音になり、残りの子音は頭子音になる。

(13) 子音連結の音節構造

ab.strác.tion, ác.tive, as.trón.o.my, Bós.ton, Bos.tó.ni.an, cá.s.tle,
com.pán.ion, hún.ger, ig.nóre, in.déed, is.land, mús.cle, pén.al.ty,
per.féc.tion, sín.gle, wál.nut

ng の n と g を分離するかどうかは、発音によって決められる。hun.ger [hʌŋ.gər], sín.gle [sɪŋ.g] と違って English は辞書では Eng.lish と区切られている。ng を尾子音とするのは sing.er [sɪŋ.ər] のように ng が [ŋ] と発音される場合であって、Eng.lish と区切ると [ɪŋlɪʃ] と発音される。[ɪŋglɪʃ] と発音するのであれば En.glish と区切らなければならない。ちなみに、辞書には二通りの発音が記載されている。island [aɪlənd] の s のように発音されない文字があっても、子音間に音節境界を置いている。

double のように le で終わっている語は、le はその直前の子音と結合して -Cle 音節を形成する。

(14) -Cle 音節

ár.ti.cle, cír.cle, cóu.ple, stár.tle, stí.fle, tré.ble, trí.ple, tróu.ble

pickle は pic.kle とか pi.ckle には区切られずに pick.le と区切られる。それは ck が一つの分節素 /k/ であるので c と k を分離できないことと、ck は語頭の位置には起こらないので、頭子音にはなれないということである。辞書での音節区分は、スペリングが大いに影響している。(14) の -Cle は通常 [-C] と成節子音に発音される。このような弱連結 (weak cluster) は、二つの子音の結びつきが強いので、一つの音のまとまりと見なされるのであろう。

C. 音のまとまり

複数の分節音が一つのまとまりをなす場合には、一つの音節を形成する。前に語根と接尾辞との結びつきが強い場合には、語根の子音が接尾辞の頭子音になる例を見てきたが、次の語は接尾辞の母音が語根の子音に影響を与えるものであり、二つの分節はまとまりをなしている。下線部がまとまりである。

(15) 摩擦音化

- a. t → ʃ : act [ækt] + ion → ác.tion [ækʃən]
- b. s → ʃ : office [ɔfəs] + ial → of.fi.cial [əʃiʃəl]
- c. k → ʃ : politic [pələtɪk] + ian → pò.li.ti.cian [pələtɪʃən]
- d. z → ʒ : close [klaʊz] + ure → cló.sure [klaʊʒər]

直後の母音に同化して摩擦音化する破裂音が、すべて接尾辞の頭子音になるわけではない。díalòg [daɪəlɔg] + ic は [g] が破裂音 [dʒ] に変化しているにもかかわらず、dì.a.lóg.ic [daɪəlɔdʒɪk] と区分されている。これは (8) の例のように派生語全体に音節区分がなされているのであり、強勢のある -log- を重音節にしているのである。log.ic や trag.ic のような語と同様の音節区分をしている。摩擦音化の音節を音のまとまりと見る他の例をみてみよう。

- (16) a. c [ʃ] : spé.cial [spɛʃəl], sus.pí.cion [səspɪʃən]
- b. s [ʃ] : re.púl.sion [rɪpʌʃən], di.mén.sion [dɪmɛnʃən]
- s [ʒ] : ví.sion [vɪʒən], di.ví.sion [dɪvɪʒən]
- c. t [ʃ] : po.sí.tion [pəʒɪʃən], pe.tí.tion [pɛtɪʃən]
- d. g [dʒ] : pí.geon [pɪdʒən], már.gin [mɑrdʒɪn]

pigeon と同音異義語 (homonym) の pidgin は pidg.in と区切られてい

る。これは dg は *judg.ment* のように単独で [d₃] と発音され、次の母音 i に影響されたものではないからである。

2.3. スペリングによる音節区分

子音が連結している場合に、最初の子音を前の母音と結合し、その他の子音は後の母音と結合すると述べたが、それと同様に、二つの同じ子音が並んでいる場合には、間に音節境界を置く。

(17) 同一子音の区分

ad.dí.tion, al.lów, as.síst, bét.ter, cár.ry, com.mít.tee, con.fés.sor,
con.néct, hám.mer, háp.py, lád.der, Mis.sis.síp.pi, óf.fice, rac.cóon,
rúb.bish, sug.gést

(17) のような子音連結を音韻的音節区分として扱わないのは、同一子音は二つで一つの分節素であり、単音として発音されるからである。*happy* の [p] が前の母音と結びつくのか、後の母音と結びつくのかは *hap.py* の分け方では明らかでない。強勢と音節を関連付けるやり方では、*háppy* は [hæp.i] となり、*raccóon* は [ræ.kun] となり、*Mississíppi* は [mɪs.ə.sɪp.i] となる。辞書のように、強勢によって重音節と軽音節に分け、それがそのまま音のまとまりとして発音されているかは問題であるが、音節と強勢を関連づける一つのやり方である。

Chomsky & Halle (1968:70-71) の主強勢規則 (Main Stress Rule) によれば、強勢は重音節に関係なく付与される場合が多い。例えば、*móther, figure, édit, stúdy, sólíd, América, cínema, aspáragus* の強勢は、重音節だから付与されるのではなく、語末第二音節、あるいは語末第三音節だから付与されているのである。Chomsky & Halle では、強勢のつく音節がどのような構造を成しているかは問題にしていない。当時はまだ、音節構造の重要性が認識されていなかったようである。

次章では母音間の子音がどのような音節構造で表されているかを、Kahn (1976) と Selkirk (1982) で見てみよう。

3. 両音節化と再音節化

前章では辞書に記載されている音節の区切り方について述べてきたが、本章では、初めに Kahn (1976) の図表示 (graphical representation) を用いて音節の構造を表そう。

母音間の子音が、どちらの母音と音節を形成するかに関しては、最大頭子音の原則 (Maximal Onset Principle) というのがある。この原則は、母音間の子音は頭子音となり得る限りにおいて、後の母音と結合するというものである。子音が頭子音となり得る限りというのは、子音連結 (consonant cluster) が語頭として可能な限りという意味である。この原則について Kahn と Selkirk は次のように述べている。

(18) 最大頭子音の原則

a. ... initial clusters are of maximal length, consistent with the general constraints on word-initial consonant clusters.

(Kahn, 1976: 41)

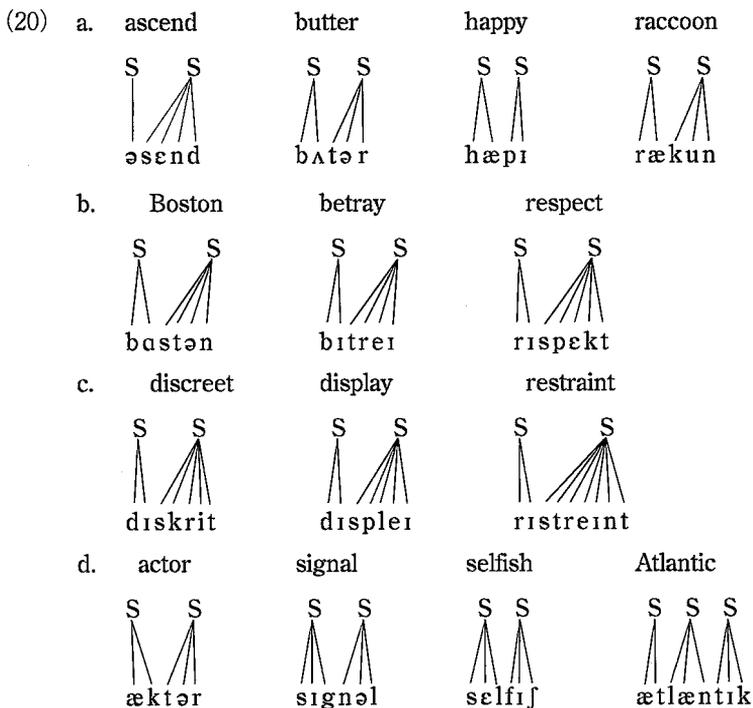
b. In the syllable structure of an utterance, the onsets of syllables are maximized, in conformance with the principles of basic syllable composition of the language.

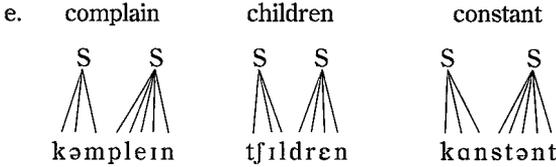
(Selkirk, 1982:359)

この原則による音節境界は、Kahn (1976:41) が述べているように、ゆっくり話す場合に途切れ (pause) として認識されるものであり、次のようになる。

- (19) a. V.CV: co.ver, hea.ven, ho.tel, i.nept, mo.ney, pi.geon, rai.ny,
tea.cher, ascend /ə.send/, butter /bʌ.tər/, happy /hæ.pɪ/,
reccoon /ræ.kun/
b. V.CCV: a.spect, be.tray, Bo.ston, re.spect
c. V.CCCV: a.stride, di.screet, di.splay, di.stress, mi.stress, re.straint
d. VC.CV: ac.tion, ac.tor, af.ter, At.lan.tic, cur.tain, men.tal, sel.fish,
sig.nal, un.kind
e. VC.CCV: an.gry, chil.dren, com.plain, con.stant, hum.bly, sul.try

(19) の音節構造を図表示を用いて表すと次のようになる。



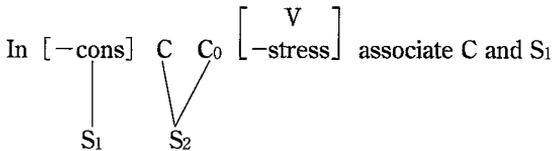


3.1. Kahn の音節構造

スロースピードで話す際の音節構造は (20) 示したが, Kahn (1976) は, 普通のスピードで話す際には音節間に切れ目がないことから, 母音間の子音が二つの音節にまたがるという両音節性 (ambisyllabicity) を提案している。両音節化 (ambisyllabification) は後の音節に強勢がない語に適用される規則であり, raccóon, recórd, betráy, respéct, distréss, compláin, abstráct のような後の音節に強勢のある語は, 最大頭子音の原則によってなされる音節区分が, そのまま普通のスピードで話す際の途切れになっている。このことは, 強勢のない第一音節は軽音節であり, 強勢のある第一音節は尾子音を取る重音節であるという辞書の音節区分と一致する面でもある。

Kahn の両音節化を見ていこう。一つは後の音節の頭子音を前の音節に結びつけるというものである。その際, 従来の頭子音と音節を結び付けていた線は消されずにそのまま残される。

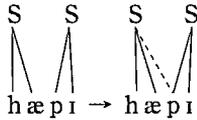
(21) 両音節化規則 A (Kahn の Rule III, p. 48)



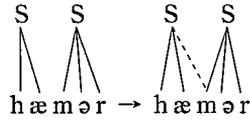
$[-\text{cons}]$ は母音とわたり音であるが, 本稿では二重母音はわたり音を用いていない。(21) の規則により, 次の点線のように頭子音が前の音節

と結びつく。なお本稿では音節を上、分節素を下に書くこととする。

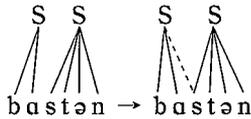
(22) a. háppy



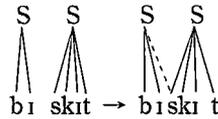
b. hámmər



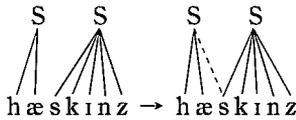
c. Bóston



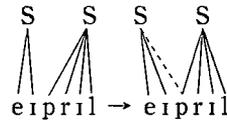
d. bíscuit



e. Háskins



f. Ápril



辞書では (22) の語は hap.py, ham.mer, Bos.ton, bis.cuit, Has.kins と区分し、強勢のある音節を CVC の重音節にしている。このことは Kahn が母音と尾子音の間に切れ目がないと感ずるのと一致している。(22a) の happy の p は無気音なので、音節の頭子音にあってはならないことから、(21) の両音節化は、帯気音化されない無声破裂音 [p, t, k] の音節構造をも表していることになる。Kahn (1976:73) は帯気音と無気音の音節を次のように表している。なお、次の発音記号は Kahn のものである。

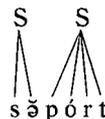
(23) a. [p] : happy



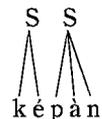
aspen



b. [pʰ] : support



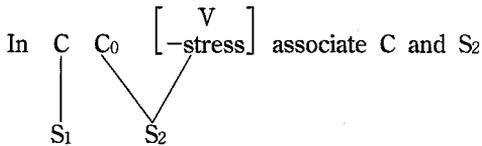
capon



(22f) の April には両音節化規則を適用してはならない。それは April の /p/ は非強勢母音の前ではあるが、次に共鳴音 /r/ があるので帯気音 [p^h] に発音されるからである。Kahn は帯気音化と両音節化の関係をどの程度考慮しているのであろうか。

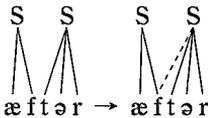
Kahn の二つ目の両音節化規則は、前の音節の尾子音を次の音節と結びつけるものである。Kahn は、普通のスピードでは *after* は *Ástor*, *Háskins* と同じく二つの子音間に切れ目が感じられないと述べ、次の規則を提案している。

(24) 両音節化規則 B (Kahn の Rule IV, p. 49)

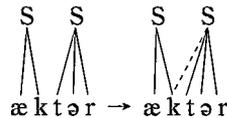


(24) の規則は次のように適用される。

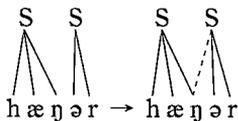
(25) a. *after*



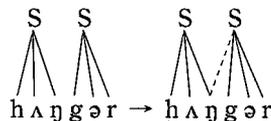
b. *actor*



d. *hanger*



e. *hunger*



(24) の規則は、子音間に途切れがないことを表しているが、それは同時に、*after* と *actor* の /t/ が無気音である音節構造を表している。

ここで (24) の規則の問題点について述べよう。両音節化を適用して派生された音節構造は、音節鋳型 (syllable template) を満たすものでなければならない。このことに関して Selkirk は、派生された音節構造に対しては音節構造保持の原則 (The Principle of Syllabic Structure Preservation) が守られるべきであると次のように述べている。

(26) 音節構造保持の原則 (Selkirk, 1982: 368)

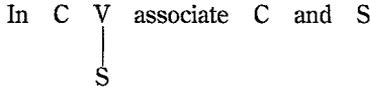
The derived syllable structure produced by rules of resyllabification must conform to the syllable template of the language.

Selkirk (1982: 367) は *pyg.my, refresh.ment* の [m] が頭子音であり、*Elm.er, garm.ent* の [m] が尾子音なのは、音節構造保持の原則に従うと述べている。Selkirk はこの原則については尾子音の分節素にのみ言及しているが、本稿では頭子音の音体系もこの原則にしたがうべきだと考える。(25a) の *after* は f が次の音節と結びつくため、後の音節は -fter となる。[ft] は頭子音としての音体系に反するものであり、音節鋳型を満たしていない。このことに関しては Selkirk (1982:370-371) が指摘しているように、(24) の規則は、後の音節の頭子音が前の音節に結びつくものに修正されるべきである。そうなれば *after* の t は尾子音となり、aft- という音節構造保持の原則に適った音節を形成する。(25e) の *hunger* も [ŋg] は頭子音になることはないので問題である。

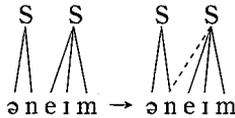
CV が基本的であり普遍的な音節であることから、母音が前の子音と結びつき、CV の音節構造を形成するのは自然な現象である。(25) の *hanger, hanging* の [ŋg] は頭子音にはなれないが、次の母音と結びつき、両音節子音になっている。CV の音節形成について Kahn は、次の例のように二つの語の間で子音と母音を結びつける両音節規則を提案して

いる。この規則は、二つの語が連続して発音される際のものであるが、後の音節の強勢に関係なく適用される。

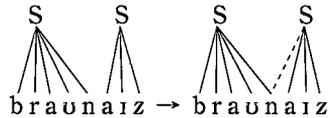
(27) 両音節化規則 C (Kahn の Rule V, p. 53)



(28) a. an aim

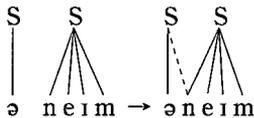


b. brown eyes



Kahn (1976:54) が指摘しているように、an aim と a name は普通のスピードでは同じ発音になる。その場合の a name の音節構造は、Kahn に従うと次のように (28a) と同じになるであろう。

(29) a name



Kahn の音節構造について述べてきたが、Kahn の特徴は、普通のスピードでの切れ目のない音節を、子音の両音節化を用いて表していることにある。しかし、音節構造を自律音節的に表しているのか、両音節化はどの程度まで用いるべきなのかという問題が残る。

3.2. Selkirk の音節構造

頭子音をその前の音節と結びつけるのが Kahn の両音節化であるが、

Selkirk (1982) も同様に、強勢のある音節にその直後の頭子音を移動し、重音節あるいは超重音節にしている。辞書では強勢のある音節を超重音節に区分することはないが、できるだけ子音を強勢のある左の音節に移すというのが、普通のスピードで話す際の音節構造なのである。

Selkirk によると、頭子音の無声破裂音は、帯気音であればそのまま移動することはないが、無気音であれば前の音節に移動しなければならない。Selkirk (363-366) が例として挙げている帯気音と無気音は次のものである。なお、強勢記号は筆者が付けたものである。

(30) 帯気音

- a. 語頭 : Torónto, pathétic, calámity
- b. 強勢母音の前 : hotél, repáir, recánt
- c. 共鳴音の前 : atrócious, apply, accrétion, inclíne, impróve, betwíxt, acquáint, actress, acrimony, cóuntrified, implicátion, aclamátion, April

(31) 無気音

- a. s の直後 : Estélle, despáir, askánce, destróy, displáy, discreét, místress, míscreant, explicáte
- b. t + l : Atlántic, antler, atlas
- c. 非強勢母音の前 : wácky, attitude, háppen, Hécate, intérpoláte, háppy, míghtiest, accólade, béaker, góiter, dígital, párticle, órchestra, túrplitude

(31b) の tl 連結音が帯気音にならないのは、t が音節末 (syllable-final) にあるからである。tl は音節頭 (syllable-initial) にはなれないので、最大頭子音の原則により At.lantic, ant.ler, at.las と区分される。(31c) は無声破裂音の前の分節音が母音と r なので、無気音に発音されるのは非強勢母音の前であると同時に、[-子音性] の後ということになる。(30)

は必然的に帯気音になり、(31) は必然的に無気音になるものである。更に Selkirk (366) は、帯気音が随意的な語を次のように挙げている。

(32) 随意的帯気音

- a. 障害音の直後: elliptical, áptitude, áctor, áfter, íctus, héfty, restrictive, prodúctive, nápkin, Átkins, Rífkin, Léfkowitz
- b. 鼻音の直後: cóntemplate, pántomime, wínter, cénter, wímpy, ámpersand, contémporary, ánchor, lánky, línkage, Ínca, bóuntiful, pláintive
- c. 側音の直後: fílter, áltitude, hélter, skélter, póltergeist, álcohol, Élka, wílkins

(32a) の napkin と Rifkin には [næp.kʰɪn], [næpk.ɪn] と [rɪf.kʰɪn], [rɪfk.ɪn] のように帯気音と無気音の発音があるのだが、音節末の [-pk] と [-fk] は音節構造保持の原則に反する。この原則はどのレベルで、どの程度守られるべきなのだろうか。この原則が守られるのは、ゆっくり話す際の音節構造であり、普通のスピードで話す際には音韻変化も生じることから、音素のレベルの音節構造がくずれることがあるのは当然である。

強勢のない音節の頭子音を左の音節に移動する規則を Selkirk は再音節化 (Resyllabification) と呼んでいる。再音節化規則は二つあるが、一つは母音間の子音を左の音節に移すものである。

(33) 再音節化規則 I, (義務的) (Selkirk の Resyllabification I, p. 365-369)

$$\begin{array}{ccccccc}
 X & [-\text{cons}] & (s) & [-\text{syll}] & \left[\begin{array}{l} +\text{syll} \\ -\text{stress} \end{array} \right] & Y & \\
 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & \rightarrow & 1, 2+3, \phi, 4, 5
 \end{array}$$

Selkirk の再音節化によって、前の核音と共に脚韻を形成する子音は、Kahn の言うような両音節音ではない。(33) の規則は義務的であり、単

子音と sC の子音群が前の音節の尾子音になって、後の音節の頭子音はなくなる。再音節化規則 I は次のように適用される。[-cons] は母音とわたり音であるが、Selkirk (366) は /r/ もわたり音と見なしている。

(34) 再音節化規則 I の適用

- a. sC 尾子音化 : wá.ster.ly → wást.er.ly, á.spen → ásp.en, Tá.sca.loo.sa → Tásc.a.loos.a, bí.scuit → bísc.uit, Bó.ston → Bóst.on, mí.stress → míst.ress (*mistr.ess), mí.scre.ant → mísc.re.ant (*miscr.e.ant)
- b. 単子音尾子音化 : /wá.kɪ/ → [wáék.ɪ] wacky, /há.pən/ → /háp.ən/ happen, /há.pɪ/ → [háp.ɪ] happy, /há.mər/ → [hæm.ə] hammer, /æk.kəlèɪd/ → [æk.ə.lèɪd] accolade, mígh.ty → míght.y, béa.ker → béak.er, góit.er → góit.er, ré.cord → réc.ord, párt.i.cle → párt.ic.le, ór.che.stra → órch.est.ra, túr.pi.tùde → túrp.i.tùde [tʰɜ̃.p.ə.tʃjùd]

頭子音の共鳴音をどのように扱うかが (33) の規則では明確ではない。wasterly の /l/ は規則によって尾子音になるのだが、April [éi.pʰrɪl] や acclamation [æk.kʰlə.méɪf.ən] の /p/, /k/ を移動しない条件を付けなければならない。更に、mistress, miscreant の /r/ が移動するのかが、(33) の規則では明確ではない。再音節化が適用されずに帯気音に発音される語は、次のように音節区分される。

(35) 再音節化の不適用

- a. 強勢母音の前 : ho.tél, re.páir, re.cánt
- b. 共鳴音の前 : a.tró.cious, be.twíxt, á.cri.mòn.y, Ápril [éi.pʰrɪl], apply [ə.pʰlaɪ], àclamátion [æk.kʰlə.méɪf.ən]

Selkirk のもう一つの再音節化規則は、前の子音の尾子音に後の音節の頭子音を移すものである。

- (36) 再音節化規則 II (随意的) (Selkirk の Resyllabification II, p. 365-369)

$$\begin{array}{cccccc}
 X & [+cons] & (s) & [-syll] & \left[\begin{array}{l} +syll \\ -stress \end{array} \right] & Y \\
 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & \rightarrow 1, 2+3, \phi, 4, 5
 \end{array}$$

(36) の規則は随意的な規則であるが、規則が適用されて無気音に発音される語には次のものがある。

- (37) 再音節化規則 II の適用

- a. CC 尾子音化: *ác.tor* → *áct.or*, *áf.ter* → *áf.er*, *héf.ty* → *héft.y*,
náp.kin → *pápk.in*
- b. nC 尾子音化: *pán.to.mime* → *pánt.o.mime*, *wín.ter* → *wint.er*,
wím.py → *wimp.y*, *án.chor* → *ánch.or*, *lín.kage* → *línk.age*
- c. lC 尾子音化: *fil.ter* → *filt.er*, *ál.ti.tùde* → *ált.i.tùde*, *hél.ter* →
hélter, *Él.ka* → *Élk.a*

Selkirk が Kahn の両音節化に反対する理由は、母音間の子音は、後の母音よりも前の母音とつながりが強いというものであるが、その一つに歯茎破裂音 /t, d/ の単顫動音化 (tapping) を挙げている。writer, rider の /t, d/ が単顫動音 [D] になるのは音節末 (syllable-final) に限るので、両音節化は不必要だとするものである。

- (38) Tap (Selkirk, 1982: 373)

$$t, d \rightarrow D / \sigma \left(\dots [-cons] \left[\begin{array}{l} \text{---} \\ +release \end{array} \right] \right) \sigma$$

(39) raɪ.tər → raɪD.ər 'writer', raɪ.dər → raɪD.ər 'rider'

Selkirk は, [D] は音節末に起こり, 音節頭には起こらないので両音節化が不必要だと述べているが, 問題がある。cat, head の /t, d/ は語末であるが, 音節末でもある。しかし, この位置では決して [D] に発音されない。catalogue, headache のように, 次に [-cons] の素性を持つ分節音が来て初めて単顎動音に発音されるのである。それゆえ Selkirk は閉鎖解放 (release) という条件を付けているのであろうが, それではなおさらのこと次の母音と結びつける両音節化が妥当となる。

Selkirk (1982:372) が再音節性 (resyllabicity) を主張するもう一つの理由を挙げよう。cóllege [kəʔɪdʒ] の /l/ は doll の語末音と同じく暗い l (軟口蓋側音) に発音される。一方, collégial [kəlɪdʒɪəl] の /l/ は明るい l (歯茎側音) である。このことは college に再音節化が適用されることによって, /l/ は尾子音になり, もはや頭子音ではないことになる。その場合, 軟口蓋音化規則は, 次のように再音節化した語に適用される。

(40) /kə.lɪdʒ/ → [kəʔ.ɪdʒ] college, /kəl.ɪ.dʒɪəl/ → [kəl.ɪdʒ.ɪəl] collegial

4. 音 節 構 造

VCV の C を強勢のある前の音節と結びつけて重音節にしようという考えは, Kahn も Selkirk も同じである。両者で大きく異なるのは, 両音節化か再音節化かである。ここで見逃してはいけないのは, 両者は共に普通のスピードで話す場合の音節構造だと述べているが, 両者には音声レベルに違いがあるということである。再音節化ははっきりと, あるいはていねいに話す場合の音節構造を表すものであり, 一方, 両音節化はくだけた話し方, あるいは速く話す場合の音節構造を表すものである。従って, 再音節化の構造は, 音節構造保持の原則が守られているものであり, 両

音節化の構造は、その必要がないものとなる。

筆者が両音節性を受け入れる理由は、前にも触れたが、音節構造はゆっくり話そうが速く話そうが、CVが基本形であるということである。récord [rɛkərd] と recórd [rikórd] を比べてみても、子音と母音は同じように連続して発音され、récord に特に [k] と [ə] の間に切れ目があるわけではない。その点両音節性では、CV音節を連続音として表現できる。

両音節化はくだけた話し方をする場合に適用されると述べたが、それに単韻動化、つまり弾音化と声門化が挙げられる。water [wɔ:Dər] の弾音 [D] と、bottle [batʔəl] の声門閉鎖音 [tʔ] は母音間、あるいは共鳴音間で認められるが、両音節性ではこれらの子音が後の母音とも結びついていることがうまく表現できる。更に、後の母音と強いつながりがある子音に、official の [ʃ], vision の [ʒ], schedule の [dʒ/dj] のように直後の母音の影響を受けて発音される子音がある。

本稿では Selkirk の再音節性と Kahn の両音節性の両方を用いて音節構造を構築するが、両者は音声レベルで区別されるものである。

4.1. 再音節性

(33) の Selkirk の再音節化規則 I は、V.CV の C を前の音節に移動するものであり、はっきり、ていねいに発音する場合の規則である。biscuit のように、-sC の連結子音も移動するかどうかについては意見の分かれるところであるが、本稿では Selkirk に従って VsC-音節を形成するものとする。Selkirk の再音節化規則 I では、mistress の [r] を移動するかどうか不明確であり、April の [p^h] も移動してしまうことになるので、次のように修正する。

(41) 再音節化規則

$$\begin{array}{cccccc}
 \text{X} & [-\text{cons}] & (\text{s}) & [+ \text{cons}] & (\text{son}) & \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ -\text{stress} \end{array} \right] & \text{Y} \\
 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & \rightarrow & 1, 2+3, 4, 5 \\
 \text{where } 3 \text{ and } 4 \text{ does not have } -\text{C} [\text{son}] \text{ cluster initially.}
 \end{array}$$

(41) の規則の適用例と不適用例は、(34) と (35) に挙げてあるのでここでは省略する。この規則に随意的な共鳴音を書き加えたのは、*mistress* のように /r/ を移動させないためである。移動させると *mistr.ess* となるが、Vstr- 音節は音節構造保存の原則に反する。A.pril は /pr/ が音節頭であるので、規則が適用されず、/p/ は帯気音に発音される。

4.2. 両音節性

(36) の *Selkirk* の再音節化規則 II は随意的な規則である。前の強勢音節にすでに尾子音がある場合には、あえて次の音節の頭子音を移動しなくても良いというものである。この規則が適用されないのは、はっきりとていねいに発音する場合の音節構造であり、音節構造保持の原則は守らなければならない。一方、くだけて、あるいは速く話す場合には、後の音節頭が前の音節と連結して発音されている。くだけた話し方の音節構造は子音の両音節化したものである。*napkin* や *Rifkin* のように移動することによって音節構造保持の原則を破る子音連結も、両音節化を用いる音声レベルでの発音と考えれば説明がつく。*Selkirk* の再音節化規則 II に換わって、*Kahn* の規則を修正した次の両音節化規則を提案する。なお、音節表示を分節素の上を書くことにする。

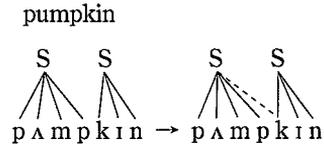
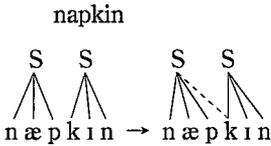
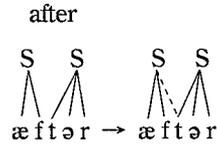
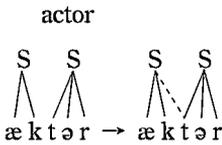
(42) 両音節化規則 I

$$\begin{array}{ccccccc}
 & & \text{S}_1 & & \text{S}_2 & & \\
 & & | & & / \quad \backslash & & \\
 \text{In } & \text{X} & [+ \text{cons}] & \text{C} & \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ -\text{stress} \end{array} \right] & \text{Y} & \text{associate } \text{S}_1 \text{ and } \text{C}.
 \end{array}$$

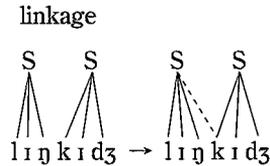
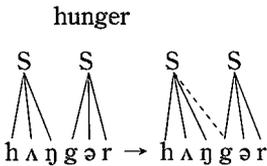
(42) の規則が Kahn のと大きく異なるのは、後の音節の頭子音を前の音節に結びつけるという点である。これは強勢のある音節が尾子音を取るという原則に基づいたものである。規則は次のように適用される。

(43) 両音節化規則 I の適用

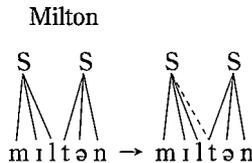
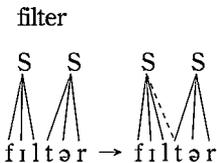
a. 阻害音の直後



b. 鼻音の直後

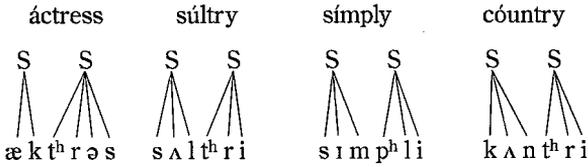


c. 側音の直後



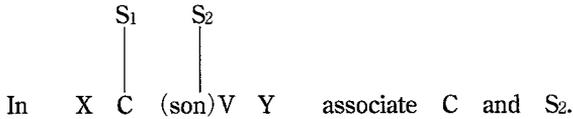
両音節化規則 I は、後の音節頭が C+共鳴音であれば、次の例のように適用されない。

(44) -Cr 音節頭



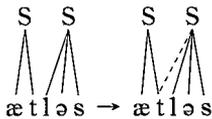
音節の基本形は CV であると述べたが、C と V を結ぶのが (27) に挙げた Kahn の両音節化規則である。(42) にならって書き換えると次のようになる。

(45) 両音節化規則 II

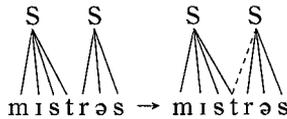


(46) 両音節化規則 II の適用

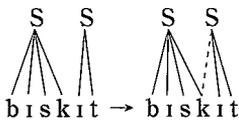
a. atlas



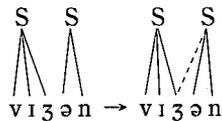
b. mistress



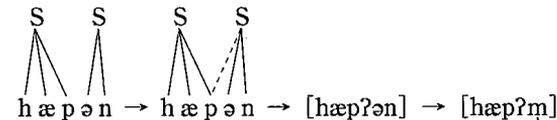
c. biscuit



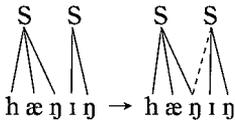
d. vision



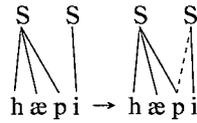
e. happen



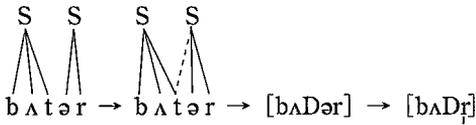
f. hanging



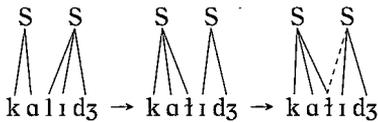
g. happy



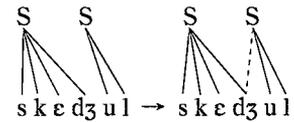
h. butter



i. college

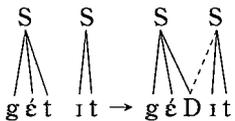


j. schedule

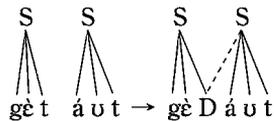


(45) の規則は次のように、強勢に関係なく、しかも語境界をまたいで適用される。

(47) a. gét it



b. gèt óut



5. お わ り に

音節構造に三つのレベルがあることを述べてきた。一つは、ゆっくり話す際の音素レベルの構造であり、最大頭子音の原則に基づいて区分される音節構造である。二つ目は、はっきりと発音する際の音声レベルの構造であり、音節構造保持の原則を守っている音節構造である。三つ目は、くだけた話し方をする際の構造であり、子音の両音節性を表すものである。

子音が二つの音節にまたがっていると考えると、母音間で起こる atlas [ætʔləs], happen [hæpʔən] のような声門化や butter [bʌDər], rider [ra:ɪDər] のような弾音化がうまく説明できる。

さて、我々の用いる英語辞書の音節区分は、音韻上どのようなものであろうか。強勢のある音節が重音節であり、強勢のない音節が軽音節であるというのは、辞書にも取り入れている原則であり、Selkirk の再音節化に見られるものである。しかもその構造は、音節鑄型を満たすものである。問題は、辞書では再音節化が義務的ではないことにある。辞書では dis.a.grée, fáil.ure, sáv.ing のような接辞添加の語は、たまたま強勢音節に尾子音があるが, créa.ture, ná.tive, ó.pen のような二重母音の音節には再音節化が適用されていない。cív.er, gív.en, réc.ord に再音節化が適用されているのであるから、音韻的には creat.ure, native, op.en のように音節区分するのが妥当であろう。それは音韻上の音節区分では軽音節は基本的には [mɪs.ə.sɪp.ɪ] Mississippi, [æ.n.ə.mæl.i.ti] animality のように短母音 /-V-/ になるからである。

辞書に両音節性でうまく説明のつく音節区分がある。ví.sion, of.fl.icial, po.sí.tion の下線部の子音は、その発音の面から、前の音節ではなく後の母音と結びついている。このことを両音節性では、前の音節との音韻的な結びつきと同時に、次の母音との音声的な結びつきをなすことでうまく説明できる。

参 考 文 献

- 荒木一雄 [編]. 1999. 『英語学用語辞典』三省堂。
 Chomsky, N. and M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. Harper & Row.
 Clements, G. N. and S. J. Keyser. 1983. *CV Phonology: A Generative Theory of the Syllable*. The MIT Press.
 堀口俊一 [監修]. 1989. 『現代英語音声学』英潮社新社。
 Kahn, D. 1976. *Syllable-Based Generalizations in English Phonology*. Doctoral dissertation, MIT. (Reproduced by the Indiana University Linguistic Club, Bloomington, 1976)
 小稲義男 [編集代表]. 1980. 『研究社 新英和大辞典』第5版, 研究社。

Laubstein, A. S. 1985. *The Nature of the 'Production Grammar' Syllable*. Doctoral dissertation, University of Ottawa. (Reproduced by the Indiana University Linguistic Club, Bloomington, 1988)

西光義弘 [編集]. 1997. 『日英語対照による英語学概論』くろしお出版.

大塚高信・中島文雄 [監修]. 1982. 『新英語学辞典』研究社.

Selkirk, E. O. 1982. The Syllable. In *The Structure of Phonological Representations (Part II)*, ed. H. v. d. Hulst and N. Smith, 337-83. Foris.